遠州新居の手筒花火

ソラダセダセヨオ

三百五十年を受け継いだ
街道筋の心意気

新緑が初夏の風にそよぐころ
新居の男たちは
手筒づくりにとりかかる

新居の手筒花火は
竹選びから火薬詰めまで、すべての工程が
花火を出す本人の手により進められます。
端午の節句が過ぎると
竹林に分け入って三年もの以上の孟宗竹を吟味し
節を抜き、畳表と縄を巻く、梨粉を詰める―。
江戸時代から続く技が
長老から若い衆へと受け継がれていきます。

竹切り

竹煮

ゴザ切り

縄巻き

梨粉詰め

■諏訪神社

景行天皇の十九年創建と伝える。祭神建御名方命ほか。延喜式神名帳所載浜名五座の一社・猪鼻湖神社を前身とし、古来新居の総氏神として尊崇を集める。天正年間、信州諏訪明神を勧請して合祀、以来諏訪神社と称える。もと海辺に鎮座されたが、明応・永正・元禄の各時代に続いた地震・津波・暴風雨等により再三移転、宝永五年（一七〇八）現在地に宮居を定められた。関所公辺の信仰も厚く、神輿渡御の際は門内立ち入りを許されていた。毎年七月の祭礼では、本殿で斎火の儀を執り行ったあと広前において煙火を奉納する。

静岡県湖西市新居支所　〒431-0303 静岡県湖西市新居町浜名 519-1 TEL053（594）1111
遠州新居手筒花火保存会　（湖西市新居支所内）

火柱が闇を突き刺す

数十の火柱が夜空を焦がし、火の海を男たちが乱舞する。
天下の奇祭 新居諏訪神社奉納煙火祭礼
遠州新居の手筒煙火は勇壮な祭りとして
広くその名を知られています。

火の粉浴び
花火野郎の
肌光る　止観

街道に名だたる奇祭
宿場町衆の命がたぎる

三河地方の手筒花火が、奉納煙火のしきたりを強く残すのに対し、新居の手筒は、太平洋を望むこの町の風土に町民気質がおおらかに溶け合い、激しく、楽しく、天衣無縫の花火を形づくり発展してきました。一気に数十本の火柱が乱れ立つ乱点（らんづ）け、笛・太鼓、天狗の出で立ちと法螺貝が奏でる愉快なお囃子―、古式を残しながらも奔放さが際立ちます。

火薬の取締りが厳しかった江戸時代にあって、多量の火薬を使う祭りが許された背景には、関所を抱えた町という事情があったと考えられます。浜名湖を渡る今切渡船や関所は江戸防備の上で重い役割を担いました。それを支えたのが宿場住民の役務・労苦でした。民衆が生命を燃やす、この祭りには人々へのねぎらいの意味もあったといわれます。

江戸時代、貞享のころより伝わる遠州新居の手筒花火は、毎年七月下旬、新居諏訪神社祭礼の奉納神事として行われ、二夜にして二千本余の手筒が闇空を彩って燃え尽きます。